

【教育】 一学校

【目次】

- 1 ハーバーフィールド小学校 (2015 年度) 1
(Haberfield Public School)
- 2 メリーランズ高等学校 (2014 年度) 5
(Merrylands High School)
- 3 メリーランズ小学校 (2014 年度) 7
(Merrylands Public School)
- 4 NSW 大学 (2013 年度) 9
(University of NSW)
- 5 NSW 州フェアフィールド高校 (2013 年度) 11
(Fairfield High School)
- 6 NSW 州クロイドンパーク小学校 (2012 年度) 14
(Croydon Park Public School)
- 7 NSW 州ウィルキンス小学校 (2011 年度) 17
(Wilkins Public School)
- 8 NSW 州ケンジントン小学校 (2010 年度) 19
(Kensington Public School)
- 9 NSW 州リバプール小学校 (2009 年度) 22
(Liverpool Public School)
- 10 NSW 州テンピ小学校 (2008 年度) 24
(Tempe Public School)
- 11 クリーブランド通り英語集中教育学校 (2009 年度) 27
(Cleveland Street Intensive English High School)
- 12 ビバリーヒルズ英語集中教育センター (2006 年度) 29
(Beverly Hills Intensive English Centre)

ハーバーフィールド小学校

Haberfield Public School

【訪問日】 2015年10月29日(木)

【対応者】 Karlyne Jacobsen, Principal

(1) 学校の概要

シドニーの西の郊外に位置している Haberfield Public School は、1910 年に設立された公立の小学校である。NSW 州の教育制度において、日本との大きな違いは、就学年齢である。日本は6歳の子供が小学校入学となるが、こちらでは5歳の子供が就学前教育として、kindergarten に入る。具体的には、就学前教育、初等教育、中等教育及び高等教育(大学、専門学校)の4階層に分かれ、初等教育は日本の小学校教育に相当するもので、year 1～6までの6年間の教育としている。中等教育は、日本の中学校及び高等学校教育に相当し、year 7～12までの6年間の教育としている。なお、義務教育は year 1～10までである。同校では、就学前教育、初等教育を対象としており、児童、保護者、コミュニティとの交流を通じて多文化主義教育を実践している。

同校では全人的教育を方針としており、音楽やスポーツ、ドラマ、アートなど勉強以外のことにも力を入れている。

(2) 教育内容

ア 中国語、イタリア語の学習

英語以外の言語プログラム(Language Other Than English)として、この学校の地域で話されている主な二つの言語は、中国語とイタリア語であるため、中国語とイタリア語の学習を行っている。

イ GATSプログラム(Gifted and Talented Education)

州が才能のある児童たちを伸ばすための教育政策(Gifted and Talented Policy)を導入しているが、同校においては、より早い時期から始める方が良いと考えており、1年生の前のkindergartenで1年間勉強した後にすべての児童を対象に学力テストを実施し、才能がある児童たちのための特別教育「GATSプログラム」を行っている。この特別教育の基本的な考え方というのは、才能のある同じ年齢の児童と一緒に教育を受けるというものである。(学校によっては、「飛び級」という制度もあるが、同校の方針では、実施していない。)

GATSクラスは、ある一つの教科ではなく、IQが高く、あらゆる教科で才能を見せている児童たちを集めて教育を行っている。(ある教科においてのみ飛び抜けている児童は、GATSクラスではなく通常クラスの中でその才能を伸ばす教育を行っている。)

なお、GATSクラスに関わらずすべてのクラスで、個人の能力に合わせたグループ分けをしている。能力に応じてクラスやグループを分けることについて、大人からは反感を買うのではないかと疑問視されるが、それは大人の考えで、児童たち自身は学力の違いを認めている。同校ではこういった個人差は、勉学のみならず、認められ受け入れられ、様々な面で個人の長所を評価している。

ウ 英語を母国語としない児童のための特別授業

英語を母国語としない児童を集めたクラスを作り集中的に英語の授業を行うプログラムと、通常のクラスの中で特別なカリキュラムを組むプログラムを併せて特別授業を行っている。後者はエマージョン（Immersion）プログラムと呼び、英語が得意でない児童も常に英語を耳にすることになる。また、補助教員がサポートすることもある。このほか、全児童向けのプログラムになるが、朝早く登校し、低学年の児童に上級生が読み聞かせを行うといった「リーディング・バディ・プログラム」を実施している。

(3) その他の活動

ア ハーモニーデー（調和日）

オーストラリア文化の多様性を祝福する日で、調和に満ちたコミュニティを実現するための日。児童たちはハーモニーデーの象徴の色であるイエローとオレンジ色の衣装を着て、全校児童の前でスピーチをしたりする。このイベントを通して、お互いの文化を共有し、尊重している。

イ Arts & Craft Show

シドニーでは毎年 Vivid（ビビッド「華やかな」）という「音と光」をテーマとした祭典が2週間にわたって行われる。大規模なプロジェクションマッピングなどが行われ、同校においても、2年に一度開く大きな Arts & Craft Show の際、児童の親の提案で、児童と児童の親による共同作業で学校版ビビッドのようなアニメーションを作成した。Son et Lumiere（フランス語で「音と光」）と名付け、学校の建物に映した。このように、児童の親のスキルやアイデアを活用することで、自分たちで取り組んだという達成感や一体感を得ることが、コミュニティを構築（コミュニティビルディング）することに繋がっている。

また、同じ時に開催したアートショーでは、特に才能に恵まれた児童たちが、色々な街を訪れて、どういった建物が「持続可能な建物なのか」を探求し、理想とする持続可能な街のモデルを作成し発表した。



図 Son et lumiere

ウ 音楽

音楽の専門家（歌手）である「デビッド・コリンズ・ホワイト」氏の指揮のもと、児童たちに音楽の教育を行っており、児童は歌やパーカッション楽器演奏などでオペラハウスでのコンサートにも参加している。同校では、音楽を通じた教育を重要視しており、3つの合唱団とバンドチームがある。

エ ダンススポーツ

5年生の児童たちがプロのダンサーからダンススポーツを学んでいる。チャチャやタンゴ、ジャイブなどを15週間にわたって学び、9月頃に他の学校と競い合う。ダンスを学ぶだけでなく、ダンスを通してチーム精神を養い、男女がそれぞれ相互に尊重し合うための気持ちを育成することにも貢献している。

オ 中国との交流プログラム

他の文化との相互理解を目的とし、中国の学校と交流している。中国の学校が同校に来てコンサートをしたことがあるほか、オペラハウスでも公演している。その他、姉妹校関係を締結し、交流を行っている中国の学校もある。

(4) その他（図書館の風景）

図書館には、児童の作品が数多く飾られており、また、様々な国の絵本が置いてあり、他国の文化を学ぶ場となっている。



(5) 児童たちへのインタビュー

Q. 文化や人種が違うことに対して違和感はないか？

また、時に異文化であることで起こる衝突はあるか？

A. 違いは当たり前であり、何の違和感もない。むしろ、その「違い」に興味があり、実際に他の文化や歴史など、お互い色んな話が聞けて楽しいと思っている。また、文化が異なるからといって、衝突に繋がることはない。

<所感>

民族的・宗教的・言語的に異なったバックグラウンドを持った児童が混ざり合った環境の中で、児童たちにどのような教育をしているのか、また、どのようにして「共生」を確立させているのかが疑問であった。

私が見たものは、児童たちは、母国の文化に誇りを持ち、大切にしながらも、異なる文化を持った児童から他文化を学び、体験することで、「違い」を理解し、尊重していた。「違いを受け入れる」という考えを、初等教育の段階でスタンダード化させることによって、「共生」の社会基盤が出来ていた。

特に、同校では、音楽、芸術、スポーツなどに力を入れられており、このような活動を通して、異文化、異民族であっても、お互いを理解、尊重し、「共生」へと繋がっている。

実際に、児童たちの合唱を聞いたとき、どの児童たちも一生懸命に歌う姿を見て、言葉や文化を超えたハーモニー（調和）を目の当たりにした。

また、こうした教育や学校のイベントに、親が携わっており、児童と一緒に取組むことによって、親が子を見て学び、そこから異文化の壁をなくしていくことに繋がり、広がっている。このことはとても重要であると感じた。

日本では、「違い」に対する理解不足がイジメや差別を引き起こす原因のひとつとなっていると思う。オーストラリアの社会基盤である「共生」の思想を日本に根付かせていくことが必要であると思うし、世界的にも根付いていくことを切に願う。



(文責 佐賀県庁統括本部消防防災課 上滝寛記)

メリーランズ高等学校

Merrylands High School

【訪問日】 2014年10月31日（金）

【対応者】 Stephen Wark, Relieving Deputy Principal
Ben Jones Head, Teacher of Learning Support
Stefanie Lia, English Teacher
他生徒6名、PTA代表3名

1 学校の概要

シドニー市の西方約25kmに位置するメリーランズ市にあるメリーランズ高等学校は、1959年開校の公立校で、オーストラリアの学制で7年生(12歳)から12年生(18歳)の男女約720名が学ぶ中等教育施設。生徒の内、約60%が英語以外の言語を母語とし、50以上の文化的背景を持っている。

2 対応者による説明要旨

生徒代表(9年生:パトリシア)による歓迎挨拶

「本校はアボリジニの人々が暮らしていた土地にあり、彼らの文化と伝統を尊重することも学んでいます。

本日は皆様への歓迎の意味を込めて、アボリジニの長老の許可を得て生徒によるダンスを披露します。

本校の生徒によるアボリジニダンスは、自治体や企業による様々なイベント、またオペラハウスでも公演しており、社会の調和や多文化主義に貢献しています。また、本校生徒への啓発の意味もあります。」



ワーク教頭代理

「多文化主義は一般的にはあまり使われない言葉で、かつては政策の一部として発信されてきましたが、その政策が成功し、現在では当然のこととして認識されています。本校では全ての生徒に対して本人の希望が叶うような教育機会を提供することに力を注いでいます。」

ジョーンズ教員(学習支援担当主任)(イギリス出身)

「本校の多文化主義への取組みですが、現在63の言語背景を持つ生徒が在籍しており、英語を第2言語とする者やアボリジニ、最近5年以内にオーストラリアへ入国した者、難民そして似たような経験を持つ者など、多様な背景を持っています。オーストラリアに来たばかりで英語が離せない人達に対する英語教育に関しては、13歳未満は小学校で、13歳

以上は IEC(Intensive English Center)で授業を行っています。また、通常の授業では、英語を第二言語とする生徒への支援のため2名の補助教師を配置しています。難民出身者には Western Sydney University と連携協力しながら教育支援プログラムを実施しています。生徒のバックグラウンドや話す言語などのデータを収集・分析、また当該生徒や保護者と面談した上で、全ての生徒に対して、それぞれの希望や能力に応じた個別の教育プランを作成しています。また、それぞれの母国が持つ宗教・習慣・文化にも配慮しており、例えば、イスラムの女子生徒に対しては個別に水泳授業を行うこともあるほか、週1時間程度、各宗教の指導者を呼び、授業を行います。

保護者との連絡手段において、政府の無料通訳サービスを使用することもあります。重要な書類については保護者が使う言語に翻訳するほか、通訳サービスを使って電話することもあります。」

レイア教員（イタリア出身）

「私は三つの役割を持っており、1つ目は多様な背景を持つ生徒がお互いの文化を理解し、そしてオーストラリア社会について学ぶ教材や文献を用いて授業する English Teacher としての役割です。アボリジニに関するテキスト、他の文化について書かれた文献を読むこともカリキュラムに含まれています。2つ目は学校と生徒が住んでいる地域社会との連携を図る Community Partnerships Officer としての役割で、生徒の両親に英語を授業したり料理教室を開催したりして、地域社会との良好な関係を構築するよう努めています。3つ目は生徒への奨学制度相談や通訳の利用、そして文化や宗教上の信仰について配慮する学年指導としての役割です。」



【授業の様子。補助教師による個別指導中】

(文責：(公財) オイスカ 四国支部 池田浩二)

メリーランズ小学校

Merrylands Public School

【訪問日】 2014年10月31日（金）

【対応者】 Wayne Simpson, Principal

Doris Lennon, Teacher of ESL (English as a Second Language)

他生徒2名

1 学校の概要

1886年に設立された公立の小学校である。現在、生徒数370人余りであり、5歳児のクラス及び1年生～6年生のクラスが計14クラス、知的障がい者のクラスが3クラス、以上計17クラスがある。移民や難民としてオーストラリアに移住した生徒が多く、約90%の生徒が英語以外を母国語としており、約11%の生徒が難民である。このような背景において、学校の課題は数多くあるが、最大の課題を言語（公用語である英語）としている。そのため、個人の必要性に応じて、英語の特別集中授業を実施している。

2 学習支援

(1) 英語の特別集中授業 (Intensive English Program)

英語を母国語としない生徒には、個人の必要性に応じて、通常の授業とは別に英語の特別集中授業を実施している。ESL教師として、常勤1名、非常勤（週3日）2名、またアフガニスタン難民の生徒が多いとのことで、アフガニスタンで話されるダリ語を話す助手（週2日）を1名配置している。当授業は1日に1時間集中的な学習をする。訪問時、来豪4～6か月である母国語ダリ語とするアフガニスタン出身の難民の子6人の授業を見学した。楽しみながら英語を覚えるため、音楽に合わせ、歌を歌い踊りながら月を繰り返していた。他には、単語が書かれたカードがいくつかちらばっており、先生が言った単語のカードを生徒がかかるたのようにとるというものであった。生徒はその単語を使い文章を作り、声に出して読んだり、ボードに文章を書いたりする。この授業ではしゃべったり、書いたり、読んだりと様々な能力を養うことを目的とした授業であった。



歌を歌い踊りながら月を覚えている様子



単語が書かれたカードを使用し、学んでいる様子

来豪後1～1年半が経過した生徒に対しては、ESL教師が通常授業のクラスに行き、パラレルクラス（1つのクラスの中に英語の補助を必要とするグループと通常のクラ

スが存在する)にて指導する。当学校では、特別集中クラスとパラレルクラスの組合せが良い方法と考えている。

(2) 通常授業

5歳児のクラスでは、XO(エックスオー)というタブレット端末を使用していた。学校用に開発されたアプリにより、生徒は楽しそうに読み書きや数字について、学んでいた。当学校では教科書を使用していなかった。教科書の使用について、校長先生と理事会とで話し合い決めることができる。



タブレット端末を使用し、学んでいる様子

3 コミュニティー及び保護者との関わり

(1) ハーモニーデー

生徒はそれぞれ母国の衣装民族を着て参加する。衣装を持ってない生徒はハーモニーデーの象徴の色であるオレンジ色の衣装を着る。また、それぞれの生徒が母国の料理を持ち寄る。このイベントを通して、お互いの文化を共有している。さらに、これまでの経験(どのようにして移住して来たか等)をお互いに話し合う機会にもなっている。

(2) 保護者との関係づくり

学校側は保護者との関係づくりを大切にしている。職員にも海外から移住して来た人がおり、ESLの先生であるドリスさんは、幼少期にパレスチナから難民としてオーストラリアに移住して来た。保護者から、自分の子の英語の能力について、不安の声が寄せられることがある。彼女は自身の経験を伝えることで、保護者に安心感を与えている。

4 気づき

個人的に一番気になったのが異文化・異民族による、いじめは存在しないのかどうかについてであった。答えは存在しない。違いは当たり前であり、違いをあえて意識しないとのことであった。オーストラリアでは、移民・難民のように同じような境遇の人々が多数存在するため、異文化等による差別を受けない。子ども達にとって、そのような多文化が存在する環境で、幼い頃から生活することで、多文化主義の思想が根付いていく。さらに、その思想が社会各層に浸透していく。一方、現在の日本では、オーストラリアと比較すると多文化が存在する地域は少なく、環境が異なる。そのため、日本社会

に多文化主義の思想を浸透させるためには、現在のオーストラリアでの政策を学ぶと同時に、オーストラリアでの多文化主義の起源について、学ぶことが重要であると感じた。

(文責：広島市南区役所生活課 三原 和憲)

NSW 大学

The University of New South Wales

【訪問日】 2013年11月29日(金)

【対応者】 Anna Martin, Associate Director, Global Education and Student Exchange
Adele Pitkeathly, Director of Studies, UNSW Institute of Languages
Sumiko Iida, Lecturer, School of Humanities and Languages
Jan Thomas, Manager, Student Development International
Yumiko Hashimoto, Associate Lecturer, Japanese Studies School of Humanities and Languages
他生徒8名

1. 学校概要

1949年に州政府により創立された公立大学であり、世界120を超える国から5万人以上の学生を受け入れている。世界の優秀な大学トップ60に選ばれており、質の高い教育・革新的な研究を強みとする国際的な大学である。

全学生の25%が留学生であり、多文化主義を実践している大学と言える。留学生の受け入れや海外大学との合同プログラムに長年の実績があるため、対応にも慣れている。



2. 留学生支援

(1) 方針

大学では、公平性・平等性に配慮しており、すべてを含む(包括的)という「Inclusivity」の考えに基づき、学生支援に取り組んでいる。例えば言語について、特化した文化や言語を避けるため、英語を話す際にはオーストラリアの特有さを除いた、シンプルな英語を話すようにしている。また、宗教上の休みも認めており、大学として、「寛容・尊敬・尊重」を実現する環境を目指している。

(2) 入学時のサポート体制

Student Development International (SDI) サービスという、生徒が空港に着いてから大学に入るまでの一連の流れをサポートする支援プログラムを充実させている。まず Welcome center でチェックリストを用い、学生ボランティアや SDI スタッフが、その学

生にとっての実用性のある情報の判別を行う。その後、3日間のオリエンテーションで学生生活がスムーズに行えるよう情報提供・支援をし、文化間交流における自信をつけてもらうことを目的とするワークショップも行う。また、充実した医療・保険・カウンセリングのサービスも提供している。

(3) 多文化交流のためのサポート体制

留学生の中には、単一文化の国からきている学生もいるため、オーストラリアの多文化を理解してもらうためのイントロダクションを取り入れている。

また、意思を持って、自らの出身国の学生とばかり交流を持たないようにしている学生も多くいる。大学でも、Language exchange program で言語交流の場を提供するとともに、授業においても意識的に地元の学生と留学生の交流を図るよう取り組んでいる。また、100ある同好会なども、学生がNSW大学のコミュニティーの一員となるよい機会となっている。

3. 学生の声（人文科学言語学科 日本研究課）

(1) 多文化社会について

- ・幼い頃からあらゆる異文化のコミュニティーが身の回りにあったため、大学生活でも多様性を感じるが、そこに違和感はない
- ・文化や価値観の違いはとてもよい刺激であり、よく真剣に討論する
- ・多国籍の学生と知り合える機会が多く、多文化を感じる
- ・あらゆる国の有名な食べ物が屋台に並び、あらゆるバックグラウンドを持つ学生たちが参加するインターナショナルナイトマーケットというイベントで文化の多様性を強く感じる

(2) 大学の魅力的なサービス・プログラムについて

- ・希望を出せば、大阪の関西大学等提携のある大学に交換留学生として派遣される
- ・大学の先輩が、入学1年目の学生に対して学生生活に適応するためのアドバイスをくれる mentor-mentee プログラム
- ・必要に応じて受講できる英語クラスや充実したワークショップ

(3) 言語について

- ・2か国語以上話せる人が溢れているので、バイリンガルも特別ではない
- ・家では母と日本語で会話し、父と弟とは英語で会話をする。英語の方が話しやすい
- ・継承語として学習するため、週末に日本語学校に通っていた
- ・韓国で生まれ、オーストラリアで高等教育を受けたが、英語の方が得意である
- ・出身のマレーシアは、中国語・マレー語・英語の3言語が使用されているが、マレー語が話されなくなっている

(4) オーストラリアでの生活について

- ・人々がフレンドリーで暮らしやすい
- ・くつろげる環境で、学業におけるストレスも多くはない
- ・家賃、交通費など物価が高く、なかなか遊びに行くことができない

(5) その他

・生まれはオーストラリアであり、「出身」という言葉の意味が、どこで生まれたのか、両親の生まれに基づくのかというところでの戸惑いがある
(今回の交流の中で、知人であった学生同士がお互い同じ香港出身であることが判明。出生地が普段の関心事ではなかったという点が詳らかになり、大変興味深かった。)



4. 参考（自治体との連携による留学生誘致への取組）

最近では、NSW 州政府の担当者が、海外から留学生を受け入れるためのプロモーション活動を行っている。NSW 州では、長期的に学生が増えていくという調査結果のもと、昨年9月に、2020年から2025年にわたっての州としての学生誘致計画を発表した。

連邦政府でも様々な教育機関と連携しており、シドニー市長もイベントの際に、シドニーの自治体が管轄するすべての大学に対する留学生への歓迎の声明を出している。

(文責：東京都福祉保健局指導監査部指導調整課 荒井瞳)

NSW 州フェアフィールド高校

Fairfield High School

【訪問日】 2013年11月27日(水)

【対応者】 Robert Mulas, Principal

Lisa Betker, Head Teacher of ESL、他生徒5名

1. 学校の概要

シドニー市の南西約30kmに位置するフェアフィールド市にあるフェアフィールド高等学校(Fairfield High School)は、個人の必要に応じて、幅広いカリキュラムと包括的な教育を提供している男女共学の高等学校である。約1,000名の生徒達が在学しており、62の異なる文化的背景を持っている。移民や難民としてオーストラリアに移住した低所得者や、社会的地位が低い家庭の生徒が多い。このような背景において、学校の課題は数多くあるが、最大の課題を「言葉(公用語である英語)」としている。この課題のために「カリキュラムの見直し」と「保護者及びコミュニティーに学校と関わってもらうこと」という2つの方針を採っている。大学卒のプロの教師が、生徒を多角的に支援している。



2. 学習支援

(1) 集中英語教育センター¹(Intensive English Centre)

移民や難民としてオーストラリアに来た子どもたちは、まず集中英語教育センターで英語を学習する。このセンターでの学習後、ESL(English as Second Language)の教育や、その他学習支援を受ける。センターでの学習期間は、通常年間を通して3学期(terms)であるが、生徒の状況により、4学期や5学期に延長されることもある。長期間センターに在籍する理由としては、識字率の低い国の出身者であったり、学習障害を持っている者であるということが挙げられる。また、英語の能力別にクラス分けされる。

センター終了後、フェアフィールド高等学校に入学する際には、学年別の主任教師が読み書き及び計算能力の試験を実施する。入学が認められると、能力別ではなく、年齢別にクラス分けされる。移民としてオーストラリアに到着する時期はそれぞれ異なるため、センターに入る時期や高等学校に入学する時期も異なる。

(2) 移行期コース(Transition Course)

ジュニア学生(7年生から10年生まで)、シニア学生(16歳以上の11年生から12年生まで)の移行期にある生徒のためのコース。高等学校に入学すると、生徒に要求される能力も高くなるため、移行期コースにおいて、様々な支援を受けながら学校に慣れていく。生徒達は、政府から提供される「Adult Migrant English Service(成人のための英語教育)」の補講を受け、英語の読み書き(Study Certificate of Spoken and Written English)を学習する。またESLでは、11年生や12年生のクラスに入り、授業のための十分な英語能力を学ぶことになる。同時に、11年生や12年生では社会や数学等の教科も学習するが、こういった科目や、その他選択科目の授業にもついて行けるよう支援を受けることができる。

(3) Parallel Classes

7~10年生は、決められた全ての教科を勉強するが、英語のクラスに関してはESLのクラスで学ぶ。ESLでは、1学年グループを2つに分け、それぞれに担当教師が就く。

(4) チームワークによる教授(Team Teaching)

ESL以外の数学や美術といった通常授業では、言葉の支援が必要な場合が多く、ESL教師がクラスに入り、言葉の支援が必要な生徒のサポートをしながら、科目担当教師(Subject Teacher)と連携した授業を行う。時間割も学生のニーズに合わせ、調整しやすいよう組まれている。



調理室の様子

3. 職業訓練

集中英語教育センターでの学習後、80%の学生は高等学校へ進学するが、20%の生徒は他校へ進学するか、TAFE(州政府が運営する職業訓練専門学校)で職業訓練を受ける。

¹学校の付属機関であり、来豪したばかりの生徒が高等学校での学習を始める準備を行う。ここでは高等学校敷地内にある。フェアフィールドの他、NSW州内に13のセンターがある。

学校では、金属加工や IT、そしてサービス業などの職業訓練授業を実施し、それらの授業が終了すると TAFE で取得する資格同様の資格証書が得られる。

4. 保護者及びコミュニティとの関わり

連邦政府から各学校へ各種プロジェクト実施のための補助金が支払われる。当高校では、この補助金を次のプロジェクトに利用している。

(1) コミュニティー連絡調整担当者(Community Liaison Officer)の任命

フェアフィールド高等学校の 98%の生徒達は移民であるか、英語を話せない生徒であり、また地域の約 60%が中近東出身者である。コミュニティ連絡調整担当者を任命し、学校は、その担当者を通してコミュニティや生徒の保護者と関わりを持つことで、より良好な関係を構築することが可能となった。

(2) Our Parents' Café

生徒の保護者達が色々な方と出会える「Our Parents' Café」という場所を提供するプロジェクトである。生徒の保護者の強い関心事は主に 2 点あり、1 点目は子ども達がオーストラリアの良き市民となることであり、2 点目は彼ら自身が、オーストラリアについての地理や習慣等を知りたいということである。

Our Parents' Café のメンバーになると、様々なイベントやワークショップに参加できる。例えば、コミュニティ連絡調整担当者を責任者とし、保護者と子ども達のグループでシドニー市へ小旅行に行くイベントの参加が可能となる。統計データによると、オーストラリアの低所得者や、社会的地位が低い家庭では、自分の住んでいる場所の 3 km から 5 km 範囲内でしか活動せず、遠出をすることがない。そのため、こういった企画をすると 100~170 名の保護者の参加希望がある。その他にシドニーマーケットまで足を運び、どのような食物を安価で手に入れ、健康的な食生活ができるのかを学んでくるイベントもある。これらの事業は、コミュニティ連絡調整担当者の努力のおかげですばらしい結果を出してきた。

また、保護者が、小学生の子どもがいる保護者との関わりなども持てるように、ミーティングを開くこともある。その他に、高校卒業後の子どもの進路の参考になるよう、大学や TAFE への見学ツアーなども行っている。これまで、パソコン教室も開催してきたが、その講師は元は難民であり、十分な教育を受けた後、このような形で自分の能力を社会に還元している。

特別なイベントや講習会としては、保護者が職員会議に参加したり、保護者に彼ら自身について書いてもらうイベントや、TAFE から講師を呼び、食物の取り扱い等について講義を行ってもらう。その他のメンバーへの支援としては、国勢調査票への記入方法や公的機関への文書作成の支援を行う。

以上のような事業を通して、学校は、保護者との良好な関係を構築してきた。色々な問題について、保護者に学校に来て話をしてもらったり、教師がコミュニティに出向き、



彼らが何を必要としているのかを聞かせてもらう。学校には、このようなことを行う職員が数多くいるので、学校とコミュニティー及び保護者との良好な関係が、学校の大きな資産となっている。コミュニティーの力を糧にし、今後の学校の方針決定に結びつけている。

(3) Community Garden

校内にはコミュニティー・ガーデンがあり、この庭は自分たちが守っていくべき庭だと認識してもらうため、保護者にその管理担当者を担ってもらう。収穫された野菜は、コミュニティー・キッチンで、生徒達の授業や保護者のイベントに利用される。コミュニティー・キッチンはケータリングサービスなども行い成功を収めている。

(文責：伊丹市国際・平和課 内垣 亜弥)

NSW 州クロイドンパーク小学校

Croydon Park Public School

【訪問日】 2012年11月21日(水)

【対応者】 Sandra Angel (校長)

生徒2名〔生徒会長(男の子)、副会長(女の子)〕

保護者2名

※同席：Jenni Shipp, NSW Department of Education and Communities

1. 学校概要

同校では、文化に重点をおいており、芸術を通じて、調和のとれた社会づくりに貢献することを目指している。38ヶ国からの出身者が通学しており、特に人数が多いのは、イタリア、中国、ベトナム、ギリシャ、トンガなど。15のクラスがあり、スタッフは24人。週5日勤務の人もいればパートの人もいる。専門講師は週数回のパートであり、読み書きの集中的なサポートや、ESLの支援、図書館の管理、文化芸術、リコーダー、バイオリンの指導などを行っている。

同校における一番の強みを「多様性」と考えている。そのため、多文化主義の考え方は、中心的科目分野(KLA; Key Learning Areas)の全てに盛り込まれている。これは、知識を身に着けることが、多様性の理解と受け入れにつながるという考え方による。生徒達には様々なルーツがある。これらのルーツや違いを、互いに受け入れることこそが、強みとなると指導している。こうした多様なバックグラウンドを抱えているがゆえに、万が一、人種差別問題が生じた場合には、生徒たちは、特別な教育を受けたARCO(Anti-Racism Contact Officer)という特別な教育を受けた教師に連絡することができる。

成績評価を年に4回行っており、学期末には直接インタビューも行う。低学年の場合は、保護者と先生、高学年の場合はそこに生徒自身も参加する。生徒自身に自分自身の目標を設定させ、次の学期末には、その達成状況等について話し合う。なお、保護者に英語が通じない場合には、政府サービスで通訳をあっせんすることで対応している。



2. 英語学習支援

英語を母国語としないLBOTE (Language Background Other Than English) の生徒に対するESL (English as Second Language) の教育内容については、専門教師と担当教師とが連携しながら、生徒のニーズを踏まえて決定している。例えば Team Teaching の採用、集中教育を行ったり、二つのクラスに分けるなどしている。すべての生徒は、英語レベルに応じて1級 (低い) ~3級 (高い) に分けられており、1級の生徒には、2ヶ月~1年未満の集中的な英語のサポートを行っている。

指導では、特に「話すこと」に重点をおいている。まずは、コミュニケーション・意思伝達こそが重要であり、次に書くことの指導が必要と考えている。英語の知識が全くゼロで来ても、学校で過ごす時間の8割は普通教室の中で過ごしている。担任の教師はビジュアル教材の活用など、様々な手段によってサポートを行っている。(いわゆる「取り出し教育」は2割程度であり、日常生活で必要不可欠なサバイバルイングリッシュなどを提供している。) これは、英語学習は自然な英語に慣れることが大切であり、そのためには、普通学級の中で過ごすことが最も重要という考え方に基づいている。

3. バディ・システム/サークルタイム

全ての授業では、協力して解決していくスタイルを基本としている。相互理解・協力関係の構築、個々の違いを受容するための教育を推進するための仕組みのひとつとして、「バディ・システム」(Buddy System) を採用している。原則低学年の生徒一人につき一人の高学年の子がバディに設定され(例: 1年生→6年生がバディ、2年生→5年生がバディ)、1学期に1回、両者の「対面タイム」が設定されており、その際に、何らかの課題が与えられる。二人が取り組んだ成果は、多文化の日(Harmony Day)に、保護者などの前で発表することになる。発表後には、Wishing Tree という木に「自分にとってのハーモニーとは何か」を書いた短冊を結びつける。

また、調和のとれた学校環境を守る仕組みとして、「サークルタイム」(Circle time) の時間を活用している。これは、皆で輪になって、様々な課題についてお互いに自由に発言し、話し合い、解決するものである。輪は安全・安心を象徴するとともに、各々に順位付けがないことを象徴している。

4. 人種差別／いじめへの対応

人種差別やいじめはまれに存在する。学校ではいじめ撲滅のための方針を掲げており、いじめが大きくなる前に話し合いの機会を与えている。具体的には、いじめが発生した場合には、被害者・加害者を交えた会議の場を設けて、被害者は保護者や友達と一緒に会議に参加し、加害者に対して責任を取って行動を改めさせるよう促すことになる。なお、これまで警察を呼んだことは3回ある。放課後にいじめや暴力が発生したことによる。たとえ放課後の出来事であっても責任は学校側にあると認識している。高校になると警察を呼ぶ回数は増える傾向にある。

その他、生徒が無記名で投稿可能なメッセージボックスも設置しており、週に1回、生徒の代表が中身を開ける。投稿内容については校長とミーティングを行い対応している。

5. 授業風景視察

3クラスの授業風景の視察を行った。①《1-2学年》ものの重さをはかる授業。コルクやビー玉やブロックなどを用いて、それぞれの重さの違いを実感しながら、ものの重さを考える授業。②《3-4学年》積み木を使って対称な図形をつくる授業。③《5-6学年》決められた設定の下で演劇を作り上げる授業。ホワイトボードには、基本的な形容詞が「ターゲット言語」としてリストアップされており、最終的に完成した台本には、形容詞に下線が引かれるとのこと。全てのKLAでターゲット言語を設定することが必要と考えられており、授業内容に応じて異なるワードリストを提示している。こうした取組みはESL以外の生徒にとっても、豊かな表現を身に着ける面でプラスになる。①②③とも学年を超えたmixクラスで授業が実施されていた。学年を超えて一緒に触れ合うことも重要であるとの考え方による。なお、1クラスの人数は、キンダーガーデンで最大20~22名程度、3~6年生でも最大30名程度。

視察後、全校生徒が外に集まり、我々に対して、生徒の代表が自分の言葉であいさつ。さらに歌の合唱とダンスを披露。なお、披露された歌(different people same together)の歌詞の概要は次の通り。「いいところを見つけよう。自信を持って背伸びしよう。違った出身地でも仲良くしよう。何か一つの声がそれを妨げるようなことはありません。...何か手の届く目標(解決策)があるのではないですか。私が一緒ならそのゴールにも手が届くのではないですか。人生というのは、自ら問いかけ、解決していくことです...」

6. コミュニティーとの協力／家庭への支援

校長は、校長自身が権力主義的になることなく、コミュニティーと学校との橋渡しに努めていく姿勢で臨んでいる。同じ目標に向かって、保護者やコミュニティーと一緒にあって、学校運営の方針を考えていきたいとのこと。実際、保護者からは、自身がこの学校で働く教師の採用選抜委員(教員3名・保護者2名)を2回も務めた旨の話があった。これ以外の委員会、例えば、学校の3か年プランを話し合い、その進捗状況や弱点などについて議論する自己評価委員会でも、その構成委員(8名)の内訳は、教員4名、P&C協会(Parents & Citizen's Association:日本のPTAと類似した組織)／コミ

ユニティー2名、生徒会2名となっている。他の保護者からも、学校の方針決定などに積極的に参画できて面白いとの発言もあった。また、この学校は、地元自治体とも強い結びつきがあり、地元自治体から、家族がどんなサポートを求めているのかを提案してもらっている。(注：日本と違い、学校は州が運営しているため、豪州の場合は、必ずしも自治体と協力する必要はない。その意味で同校の取組みは特徴的。)

さらに、シドニー大学とも協定を結んでおり、ソーシャルワークの専門知識を学んでいる修士課程の学生に、小学校に実習に来てもらう仕組みを設けている。大学の修士課程の学生を招聘する例は少ないが、数名の校長と共同で州政府に働きかけをして実現した。その学生は、生徒達と触れ合いながら、悩みなどについてのミーティングなどを経て、問題になっている事柄などを学校に報告した。この結果を受けて、2年目には、保護者を対象に、生徒にとっての学習障壁の有無や、学校のサポートに満足しているのかどうかの調査を行うとともに、その結果を分析し、修士課程の学生が、支援が必要な家族を集中的にサポートした。なお、研究の結果明らかになった家庭の課題は、貧困、住宅、家庭崩壊、DV、メンタルなど。家庭環境の破たんが、生徒本来のポテンシャルの発揮を阻害していることが見て取れた。

(文責：佐賀県 新産業・基礎科学課 田島 誠)

NSW 州ウィルキンス小学校

Wilkins Public School

【訪問日】 2011年11月21日(月)～22日(火)

【対応者】 ジェイソン・ウィルキンス氏(校長)

DECにてNSW州における多文化教育プログラムについて説明を受け、実践の場としてNSW州立ウィルキンス小学校を訪問した。

(1) NSW州立ウィルキンス小学校の概要

生徒数556名、その構成は43カ国語の言語、50以上の国、7つの宗教といった多様なコミュニティからの子供たちが集まっており、多文化教育においては先進的な取り組みをおこなっている学校のひとつである。大変人気のある学校で5、6年生のクラスに選抜クラスも設けられていることもあり、生徒数は3年間で100名増えている。通学時間に50分ほどかかる場所から通学している生徒もいる。

(2) NSW州立ウィルキンス小学校における多文化教育

多文化教育を進めるにあたってその指標となる5つの項目をあげている。

①文化に触れる

- ・多くの文化や言語に触れることにより違いを受け入れる姿勢を身につける。
- ・3つの言語と文化、宗教、アボリジニについて学ぶプログラムを実施している。特に先住民であるアボリジニを重視している学校としてはオーストラリア随一。

②貢献する機会を作る

- ・あらゆる手法で生徒が学校において貢献できる道をつくっている。
- ・ウィルキンスグリーン活動として保護者を中心に敷地内の除草、ニワトリの世話などを行っている。
- ・各コミュニティの伝統料理などを持ち寄り、食を通してそのコミュニティの文化の理解につなげるフードデイの実施、ボランティア活動、保護者による学習プログラムの実施など。

③コミュニケーション

- ・校内で活動する正式な機関は自治体が運営するプレスクール、ウィルキンスグリーン、ウィルキンス音楽、P&C協会（Parents & Citizen's association；日本におけるPTAのようなもの）があげられ、非公式な機関も沢山存在する。各組織等とのコミュニケーションはとても重要な事項である。
- ・このような状況の中、地域教育事務所の学校教育部長の役割（前記のとおり）は重要なものとなっている。

④価値観

- ・子供に教えるべき大切な価値観は、尊敬、思いやり、勇気、民主主義である。
- ・まずは自分に自信を持ち独立意識を持たせることで、他との違いに対応できるようになる。
- ・これらの価値観は人間関係で自然なこととして小学校で教えることにより一生のものとなる。

⑤サポート

- ・このサポートは他の文化からオーストラリアに移住した生徒が対象となる。
- ・ESL（前記のとおり）母国語が英語でない生徒をサポート。英語を身につけると同時に、母国語を保護することも大切にしている。子供はすぐに英語を話すことができるようになる。入学時に英語が全く話せなかった生徒が6年生には学校のキャプテンとなったケースもある。

これらの5項目は同時に達成しなければ成立しない事であり重要なものである。

(3) P&C活動

保護者の方よりP&Cの活動について説明いただいた。

P&C会員となるためには会費を払い、同時に選挙権を持つこととなる。主な活動は学校のニーズベースでのサポート（専門的な能力を持った保護者が活躍）や、募金活動、学校イベントのサポート、社会的ネットワークの構築などである。代表の選出、募金の使い道などは選挙で決められる。P&Cは学校運営にはほとんど関わらない（校長はそれが良いと考えている）。しかし、保護者と学校のアクセスポイントとして大切にされ、教員が参画することもある。

(4) 校内の様子

一連の説明の後、小学校の施設等を見学し、生徒たちの生き生きとした活動やP&Cによる校内環境整備（遊歩道の設置など）の様子を見ることができた。



事務所入り口



ゆとりある教室の設置



整備された広大なグラウンド



P & Cによる遊歩道の工事



敷地内を案内するウィルキンス氏



軽快な音楽でダンスする生徒たち

(文責：山形県川西町産業振興課 主任 神尾亜希之)

NSW 州ケンジントン小学校

Kensington Public School

【訪問日時】 2010年11月16日(火)

【対応者】 Annie Jones 氏 (Principal)

私たちは講堂で弦楽サークルの子ども達による演奏の歓迎を受けた。この弦楽サークルは今年度結成したサークルで音楽大学に勤める保護者がボランティアで講師を務めている。私たちが歓迎するため練習を重ね、「さくら」を演奏して下さった。

・校長先生による説明

この学校は 400 人の定員規模の小学校で、現在は所定の定員を若干下回っている。在籍する生徒の 75%がオーストラリア以外の国をバックグラウンドとしており、その家庭では 60 以上の言語が母語として使われている。また、その出身国は 34 カ国を数える。学校の運営は多文化を尊重し、とても上手く運営できている。その理由は2つあると考えられる。

- ①生徒が特定の民族にかたよっていないこと
- ②人種差別をしない教育に力をいれていること。

・児童会副会長あいさつ (バングラディッシュ出身5年生)

この学校には 60 以上の文化があり様々な文化を学ぶ機会がある。その機会の 1 つに文化の日がありとても楽しみにしている。「多分化デー」にはいろいろな珍しい食べ物を食べたりダンスを見たり多文化を体験する。それはとても素晴らしいことである。なぜなら、もしお花の色がみな同じであったらつまらない。色々な色があるから楽しい。なの

で、多文化は素晴らしいこと。

この5年生の女の子は堂々としており多文化に対し自信に満ちたあいさつが印象的であった。

挨拶の後、子どもたちによる歓迎セレモニーがいくつか展開された。中でも生徒が、自分のバックグラウンドのプラカードを持ち現れ、母語であいさつをするものがあったが、その人数が多く人数を最後まで数えることができなかった。バックグラウンドの多様性を目の当たりにした。



バックグラウンドのプラカードを示す児童



ギリシャ語L2の教室

・日本人保護者による説明（NSW 州立大学客員教授）

この学校は教育環境に恵まれたとても良い学校だと思う。近くに州立大学や病院がありそこに留学する人や働く人が世界中から集まってくる。大学の関係者の子どもも多く在学している。いろいろな文化を体験できる多文化デーなるものがあり保護者が様々な料理を持ち寄ったり舞踊を披露したり保護者も子どもも多文化を体験することができる。日本のような保護者が組織するPTAのような組織はないと思うが、自発的に保護者が学校に関わる人が多い。それぞれの得意分野で自発的に関わっている。特に父親が学校と関わりを持っているように感じる。お迎えにくるお父さんも多い、またこの学校の保護者は、両親とも教育熱心な方が多く校区外から通学する児童もいる。

・第2言語の学習について

ケンジントン小学校には、第2言語の学習があり中国語の先生とギリシャ語の先生がいて児童は、L1クラスとL2クラスに分けられる。L1クラスでは、中国語とギリシャ語を母語とする児童がその母語を学習しL2クラスは英語を母語とする児童も中国又はギリシャ語のいずれかを選択し、ネイティブの生徒と一緒に学習する。やはりL2クラスの方が人数的に多い。私たちが見学したクラスはL1クラスの中国語とL2クラスのギリシャ語であった。

この学校は現在、中国と結びつきの強い学校で、校長先生が昨年中国に招待され中国の学校を視察し、今年度は別の先生が中国へ行っているとのことであった。また、校内でいくつか場所に中国のものと思われる飾り物などが掲示されていた。

中国はオーストラリアの教育制度に関心をもっており、来年、中国政府より教師が派遣されオーストラリアで初めて中国語教師のためのクラスもできるとのことであった。

・ ESL (English as a Second Language) 学級について

ESL 担当教諭 キャサリン・スミス先生の説明

ESL の担当教諭は ESL の研修を受けて各学校に任命される。ESL の担当教諭は子どもの第 2 言語としての英語担当教諭だけではなく、ESL 教育を受ける子どもの保護者の相談相手の役も担っている。よって保護者が学校へ相談事で来校することを歓迎している。保護者が学校へ訪れる時は教育に関する相談もあるがそれ以外にコミュニティーに関する相談や生活に関する相談もあり様々である。教育に関する相談はもちろんすべての相談に応じるようにしている。

教師が子どものバックグラウンドを理解すること、子どもの生き立ちを理解することは英語を学習させる上でとても大事なことで、その子に合った教育方針を立てることができる。

ESL 担当教諭は一般の教師に対して ESL に関する校内研修も行う。特定の教科の特定の言葉を子どもが知っているとは限らないし、教科で使う特定の言葉を指導したり児童との関わり方を指導することもある。

この ESL 教室では様々な国の子どもと一緒に学び、そのことが、お互いに英語を学ぶ上でとても良い環境になっている。

普段、英語の授業中は、子どもの母語は使わないように心がけている。しかし大切なことは母語で解りやすく説明している。また、子どもが間違えると自尊心を傷つけ畏縮することに繋がるようなことは母語で確実に説明するようにしている。例えば「明日は制服を着てこなくてよい」ことや学校内の制度が変わるなど大切なことなど。また、算数などの概念が理解できないときは母語による説明を認めている。

朝 1 番の授業は母語による学習は行わない。学校からの帰宅後、子ども達は 10 時間以上、母語の中で生活していたのだから英語に戻す必要がある。また、音楽や体育など体を動かす授業や英語が分からなくても楽しめる授業は、普通学級で受けさせる。そういう楽しい時間は他の児童と仲良くなるチャンスだから。低学年の児童は少なくとも 2 学期間は英語を集中的に勉強し宿題も出すようにしている。高学年になるともっと多くの宿題を出すようにしている。

・ 学校の特徴的な印象に残った取り組み

子ども達が募金をして 2 人の子どもの里親スポンサーとなっている。それはバングラディッシュのシャンとカンボジアのショーである。その 2 人の子どもを資金面で支えることは、自分も世界の一員であることを理解するとともによい教材となっている。

(文責：那覇市総合青少年課 主査 上江洲 寛)

NSW 州リバプール小学校

Liverpool Public School

【日 時】 2009 年 12 月 3 日 (木) 10:00~0:20

【対応者】 校長先生、Ms Katina Varelis (Director)、生徒 (授業風景案内)

1. 業務概要

NSW 州が設立した就学前 1 年間 (kindergarten) 及び小学校 1 ~ 6 年生を担当する公立学校。同校の所在するリバプール地域は、英語圏外の地域から移住してきた児童や経済的社会的に不利な状況にある世帯を抱える地域で、同校では、児童・保護者・地域住民の相互交流の機会などを通じて異なる文化を尊重する多文化主義教育を実践している。

2. 発言要旨

(1) リバプール小学校について

・生徒数について

生徒数は 672 名。年間を通じて 200 名を超える難民が生徒として編入してくる。英語が第二言語となるこれらの子供たちに対応するための教師は 7 名在籍。

(2) ESL (English as a Second Language) (第二言語としての英語) サポートについて

① ESL のサポートはいくつかのレベルで行われている。

- ・基礎的なレベル
- ・社交的な言葉としてのレベル
- ・難しい言葉としてのレベル

新規の入国者は、それぞれの英語のレベルに合わせて小人数のグループに分かれ ESL のサポートを受けている。

② ESL サポートの現場について

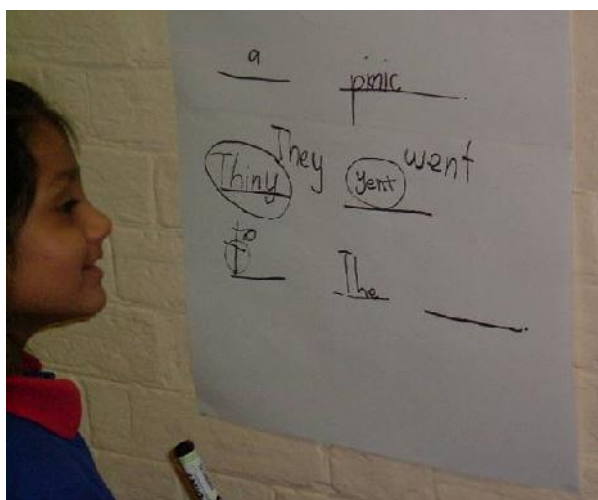


←リバプール学校に通う生徒達。

彼らが 2 人ずつ 4 チームに分かれ、日本からの訪問団を各教室に案内してくれた。彼らも、戦争等の様々な事情で自分の国を離れオーストラリアに移民してきた。先生等の大人のサポートは一切ありません。

ESLプログラムに従い、英語の集中サポートを受ける生徒達→

これは、ビンゴのゲーム形式のESLプログラム。机上のビンゴカードには食べ物の絵が書いてあり、一人が食べ物の名前を英語で読み上げ、他の人がビンゴを完成させるゲーム。単語がわからなくて先生に尋ねる場面も時折見受けられた。



←Kindergarten のESL の授業風景

先生が絵本を読み、生徒がその内容をヒヤリングして、紙にその文章を書いている。間違った単語も生徒自身が直していた。

ESL のサポートを受けていない子どもの授業風景→

日本の学校のように先生が何かを教えるというのではなく、生徒が困った時に先生がアドバイスをしている。

*リバプール公立小学校 (NSW州の公立学校全般?) では、子供たちが基礎的学力をつけるためのカリキュラムはあるが、算数を除いて、その他の教科には教科書がない。そのため、ESL で学んでいない子供たちに比べESL で学んでいる子供たちの授業単元理解度は当然のこととして浅くなるが、教科書がないため、生徒1人に対する同じ単元の授業へのアクセスは1回に限られておらず、通常、複数回同じ単元の授業にアクセスする機会を有している。

従って、ESL のサポートを受けている生徒達が普通のクラスに戻ってきたときにいずれかの機会においてその単元に接する機会があり、ESL で学んでいる子供とそうでない子供の差は徐々に小さなものになってくるとのことであった。



(3) 今後の課題について

リバプール公立小学校では、保護者のサポートが活性化していない。これはこの地域の移民の多さにも関係していることでもあるが、英語でコミュニケーションをとることが得意でない保護者が教育関係者と英語で話すことを忌避していたり、そもそも、学校へ関与する概念すらない民族の人々もいる。

学校としては、こうした保護者の学校への関与を深めるため、様々なイベントを企画して、保護者の学校への関与を強めながら、保護者のサポートの活性化を目指している。

(文責：愛知県国際交流協会 中島正人)

NSW 州テンピ小学校

Tempe Public School

【日 時】2008年12月4日(木) 9:30~12:00

【対応者】Ms Jenny Liessmann(Principal)

1. 学校の概要

同学校はニューサウスウェールズ州立の学校であり、全児童の80%以上が英語以外の言語環境の家庭で生活している。この学校に通っている子どもたちは言語環境をはじめ、英語の習得状況、生活文化など様々であり、20以上の異なるバックグラウンドをもっている。学校側は子どもたちの多様性が大きな可能性につながると信じ、英語を習得するための授業はもちろん、異文化理解や国際理解教育にも積極的に取り組んでいる。

2. 校内の様子

学校の至るところまで、世界各国から集まった民芸品を飾っており、子どもたちが常に体でいろんな国の文化に触れられるよう工夫をしている。学校の建物全体は美術館のような空気が漂っており、子どもたちの絵をプロの作品のすぐ隣に飾ることで、移民である子どもたちに自信をもたせる。



図書室にて

3. 参考になるところ

① 学校と多文化保護者との関わり方

保護者は学校活動への参加を希望することができる。どうしても英語が比較的得意な白人系の保護者が学校へ足を運ぶことが多い。親が自分自身に自信をもたなければ、子どもたちも劣等感を感じやすい。子どもたちの移民である劣等感をとるために、学校

側は特に白人以外の保護者に学校活動へ参加してもらえるよう心がけている。多文化の親を学校へ迎え、その保護者の得意なことを子どもたちに教えてもらう。字が得意な保護者であれば子どもたちに習字を教えてもらい、英語はできないが、多言語での読み聞かせや歌などを通して子どもたちと一緒に学習活動に参加する。一人で学校に行くのは不安な親がいれば、他の親の助けをもらい、徐々に学校活動に参加するケースもたくさんある。

早くから移民政策をとっているオーストラリアと比べ、日本の方が言葉のできない保護者が多いと思われる。日本語も日本の学校制度もわからない保護者はどうしても学校に近付きにくいのは事実である。一方、多くの学校は同じ理由で外国籍住民である保護者に近付こうとしない。そのため、学校と保護者との距離はますます遠くなってしまい、コミュニケーションをとれなくなる。

子どもたちを育てるために、学校と保護者とのコミュニケーションは必要不可欠だ。学校側に今以上に外国籍住民である保護者への言語面におけるサポートや文化面の配慮をしてもらいたいのはいうまでもない。しかし、外国籍住民が自ら子育て活動に参加しようと思わなければいつまで経っても学校に任せっぱなしの状態は変わらない。学校と協力して子どもを育てられるよう、保護者に日本語、学校制度、学校生活について学び、積極的に学校とコミュニケーションをとるための努力をしてもらいたい。外国籍住民は言語、文化などのハンディをもつことで、どうしても受け身になりやすい。外国人も住みやすい町をつくるために、日本人に任せるのではなく、外国人自分自身が当事者にならなければならない。日本語のできる外国籍住民が同じ国あるいは同じ立場の他の国の外国人をサポートすることがとても大事だと思う。私たちのまわりにそういうリソースがきつという。外国籍住民が外国籍住民をサポートすることを視点に入れて、これからの日頃の業務に取り組みたいと思う。

② 多言語を学ぶプログラム

子どもたちに異文化への理解を促進するため、同学校では、全ての児童が母語以外の言語を一つ以上学ばなければならない。英語を学ぶ必要がある子どもは ESL（第二言語としての英語）で英語授業を選び、英語を学ぶ必要のない子どもは第二言語の授業を一つ選択しなければならない。その言語を使っている児童が学校児童総数の 10%以下になる場合のみ、当該言語の教職員を設置しなくてもよいが、それ以外の場合は常に多言語の教室が開けるよう、学校が多言語対応のできる職員を採用しなければならない。言語教育のできる教職員がすぐに見つからない場合もあり、現在地域で使用人数の多い中国語、フィリピン語、ドイツ語、トンガ語、ベトナム語の授業を開講している。また、言語だけではなく、子どもたちが文化理解もできるよう、文学、歴史など文化にも触れられるような教材を慎重に選ぶそうだ。

③ ESL（第二言語としての英語）プログラムについて

学校の特別な配慮で実際に ESL 授業の見学をすることができた。

英語学習が必要な子どもに対し、第二言語として



ESL プログラムの一コマ

英語を学ぶ ESL プログラムを開設している。ESL の方針や教え方など全て政府によって定められている。また、ESL プログラムを実施する教員は州政府から直接学校へ派遣され、スキルと豊富な経験をもつ質の高い教育能力が要求される。

オーストラリアの場合は児童・生徒の発達段階に応じて英語の学習方法を分けて考えている。言語の構成を大きく分けるなら取得しやすい日常用語と難しい抽象的な学習言語がある。中学校・高校になると専門用語が増え、発達段階と同レベルの英語力がない生徒は圧倒的に多いようである。その様な場合は、短期間集中英語学習センターで日常用語と教科用語の両方を勉強しなければならない。小学校の場合は日常用語と学習言語が近いので、英語で学ぶ力を重点において学習活動を展開していく。また、母国語への理解が深まれば英語学習にも役立つと考えているので、ESL プログラムで子どもたちに英語で学ぶ力を徹底的に身につけさせると同時に母国語教育にも力を入れている。子どもたちは 5 歳から入学し、担任の先生が責任をもって英語と母国語教育を同時に行う。一つの言語が確立しなければ、第二言語の上達が遅れるという説もあるが、同小学校では発達障害のない子どもであれば 5 歳になった段階で一つの言語を確立できると考えている。そのため、小さい子どもたちにネイティブ並の英語力を身につけさせるのに、この学校では英語と母国語の両方を同時に学習させる。

一方、二つの言語を同時に上達する例もあれば一時的に英語が上手になったり母国語が上手になったりする例もよく見られる。特に日本人移民の保護者の場合は子どもたちに英語力をつけてもらいたいがために、日本語の学習環境を完全になくし、英語学習に集中させる親が多い。学校の話によると、子どもたちは 8 歳から 9 歳ぐらいになれば抽象的な学習能力がつくので、英語と母国語をリンクさせることによって英語で学ぶ力がより早く身につくそうである。

日本では ESL とよく似た JSL (第二言語としての日本語) プログラムがある。JSL は外国にルーツをもつ子どもたちが日本語で学習する力を身につけてもらうためのプログラムであり、児童生徒の発達段階に応じて、学習活動に参加できるよう日本語で教科学習の支援を行う。地域に住んでいる外国にルーツを持つ子どもをサポートするため、各地域国際化協会は様々な事業を展開しているところである。和歌山県国際交流協会の場合は学校より依頼を受け、日本語ボランティアを学校現場に派遣し、日本語指導に当たるシステムを設けている。しかし、日本語ボランティアの主な役割は日本語を指導することであり、日本語を教えられても教科学習指導のできない方がほとんどである。学校によって日本語ができないことを理由に本来学校がすべき外国人児童生徒への学習指導を怠り、日本語ボランティアに任せることもよくある。その結果、日常会話は上達していくのに、学習活動に参加できない子どもたちが現れ始めた。学校生活を送れるよう教科学習支援も大切であり、教科学習支援なしの日本語指導活動の限界を感じている。JSL プログラムなら日本語で学習活動に参加できるようになっていくので、子どもたちは日本語で学ぶ力が身に付き、本当に必要な学習支援につながる可能性が高い。今回の研修は日本語ボランティアを学校へ派遣する活動を振り返るためのいいきっかけとなり、これからの外国人児童生徒の学習支援の事業展開に役立つと思う。

【文責】

財団法人和歌山県国際交流協会 時光

財団法人名古屋国際センター 大山 陽子

クリーブランド通り英語集中教育学校

Cleveland Street Intensive English High School

【日 時】2009年12月1日(火) 10:00~11:30

【対応者】Jennifer Pilon 校長先生、Kathie Power
教頭先生



この学校は、オーストラリアに到着したばかりで新たに生活を始めようとしている永住者や一時滞在者(中学1年~高校3年)を対象に、教育に必要な英語教育を行う州立の学校です。

地元公立学校への入学前15~50週間、その後の地元での学校生活への円滑な橋渡しが出来るよう集中的に英語の授業および学校生活に必要な知識の提供を行っています。

今まで同校で学んだ生徒の国籍は100カ国を超えています。

また、それまでになかった言語を母国語とする生徒が来た場合にもそれに対応するためのスタッフを必ず見つけ出します。今までに該当スタッフが見つからなかったことはないようです。

30以上の異なる言語背景を持つ生徒が通う同校では、協調・平和・相互愛の精神を教育方針に掲げ多文化主義教育を行っています。

現在、日本からの留学生はいませんが、2~3名いることもあります。

教師は仕事を行ううえで法律を守って、平等なプログラムで生徒をサポートします。

生徒は年齢・学年・英語能力のレベルによってクラス分けされ、常にモニタリングを受け、現状把握が行われています。

カウンセラーと呼ばれるスタッフは、生徒のサポートをしながら今後の方向性やこの学校を卒業した後のことについてカウンセリングをし、アドバイスをしてくれるのです。生徒が最初に信頼するのは、この人達です。

バイリンガルサポートスタッフと呼ばれる人は、生徒の学習と福祉のサポートをするため、生徒・両親・保護者・職員間の通訳や、授業中の生徒と教師の意思疎通を手助けし、カウンセラーと連携して生徒の地元公立学校への移行を援護します。

課外活動も盛んに行われ力強い連携が図られています。水曜日と木曜日にはアフタヌーンクラブという活動もあり、青年ワーカー(牧師等)の協力により宿題を見てもらっ

たり、ゲームをして遊んだりして子供らしい時間も与えられています。

このように、細部にわたり各専門分野の担当者がいるため、日本の教師のように一人で全てを担当するわけではありません。カウンセラー、ヘッドティーチャー、サポートスタッフ等で分担するため、日本の教師のように忙し過ぎてうつ病になるというようなことはないようです。

もちろん生徒の学問的な評価もします。生徒の学力と英語能力に差がある場合には、読み書き能力、音楽・スポーツの評価など、最近の成績表の提出を受け、バイリンガルスタッフが介入してサポートします。

生徒の親へは母国語での読書や勉強の継続を依頼し、母国語の能力を維持し継続することの大切さも学ぶようにしているようです。

最近、新しい知識を得るためのラップトップ型のパソコンの支給を政府から受ける機会がありましたが、その際政府は、この学校の現状把握をしているのか？という質問ができました。



縦割り社会というのは世界各国同じようで、現場の声はなかなか届かないようです。最近 15 年の間に法律の改正およびプログラムの見直しが行われ、予算が少ない中でも改革があったようです。

最近では、一般人の政府を見る目が変わり、政府が目標を達成することが国民の満足となる時代になりつつあるようです。

社会が大きく変わり、少ない資金をより良く使うという点から、説明責任も生じ、学校も透明性を求められ、財務報告等も Web で公開されるためこれまでのような縦割り社会では対応できない時代になるようです。

校舎に入ってすぐの講堂では、発表の場が設けられており、しばしば生徒による意見の発表がされているそうです。子供の頃から、皆の前で自分の意見を発表する場を設けられているということは、とても素晴らしい事だと思いました。

また、時間の都合で、授業風景を見られなかったのがとても残念でしたが、ちょうど水曜日だったため、アフタヌーンクラブの最中で子供達の楽しそうな笑い声が聞こえていたのが印象的でした。

女責 (消防団員等公務災害補償等共済基金 矢部 好子)

ビバリーヒルズ英語集中教育センター

Beverly Hills Intensive English Center

【日 時】 2007年2月2日(金)9:30～11:30

【対応者】 Mr Michael Harmey ほか

Beverly Hills Intensive English Centre は、母国語が英語以外の全新規移民子弟の中・高校生を対象にした公立特別高等学校である。(豪州教育制度は、小学→高校(中・高一緒)である。)主流の現地高校や TAFE(Technical and Further Education 公立の職業専門訓練学校)で引き続き支障なく学習できるよう英語力をつけるとともに、新地での環境や生活になじめるようサポートする学習・適応施設である。

私たち一行は、校長である Mr.Michael Harmey 氏より出迎えを受け、施設を案内していただいた。

まず、スタッフルームで大まかな説明を受けた。部屋の壁には、全生徒のカードが貼られてあった。カードには、生徒の顔写真、生年月日、ビザの種類などが記載されてあった。ビザの種類を明記するのは非常に大切である。このカードは、生徒のレベル別(入学別)に整えられているため、生徒ひとりひとりの状態や学習レベルを常に把握できるようになっていた。生徒は難民が多く、現在この施設には、30カ国からの難民の子どもたちが学んでいる。多くは、中国、アラブ諸国、スーダン、シエラレオネなどのアフリカからの子どもたちであった。母国シエラレオネで両親が殺されたという境遇の子どももいるということであった。難民(特にアフリカ諸国)の子どもたちは、継続的に教育を受けていない、または全く教育を受けることができなかったこともあり、特別ニーズが必要であるということである。

本校の設置目的は、英語の能力をアップすること、また、普通の高校で生活できる能力を身に付けさせることである。移民は十人十色なので、人間はそれぞれ違いがあり、それぞれに違いがあっても、特別な人間であるという概念を伝えており、お互いを尊重するようにと指導している。また、自分の母国を捨てないようにしようというのが教育の信念である。

職員、先生方については、その資質、意識の高さが求められるが、ここでは、その問題を完全にクリアしていた。スタッフには、ベトナム語やアラビア語、広東語などができる方がいた。また、クラスを受け持つ先生方は、学位を持ち、高校や ESL (English as a Second language) で教える資格を持っていた。

生物の先生は、博士号を持っていて、コウモリの研究者であるとのことであった。スクールカウンセラーもいて、子どもたちの心のケアにも細心の注意を払っていた。全ての生徒の親も、カウンセラーと相談するというのであった。

この学校の存在を知るのは、移民のコミュニティーグループからの紹介や、普通の高校からの紹介であるようだ。

学校案内には、親と生徒へのガイダンスが細かく記載されている。困ったときに相談する先生のことでも紹介されていた。家庭のことで悩んでいるなら、〇〇先生の所へ、先生の

ことで悩んでいるなら、〇〇先生の所へ、人種差別のことで悩んでいるなら、〇〇先生の所へ、などと明記されている。移民の子どもたちが抱える問題にも、先生方全員で対処していた。そこにこのようなメッセージが書かれていた。

—このセンターの仕事は、あなたを幸せにし、安心して学ぶことができるようにすることです。あなたが一人で問題を解決することを期待していません—

私たちは、次に、教室に案内され、子どもたちから、校歌斉唱の歓迎を受けた。アジア系、アフリカ系、ムスリムのスカーフをかぶった子どもたちが、黒板の前に整列し、数年前にできたばかりの校歌を、ギター伴奏に合わせて披露してくれた。この日のために、何回も練習したのであろう、誰も間違えることなく、表情豊かに歌ってくれ、私たちは非常に感激した。

また、私たちは、生徒が実際使っているテキストを見せていただいた。私たちにとっては普通の本でも、アラビア語圏の子どもたちにとって、ページのめくり方が反対であることもあり、困難さがあるとのことであった。また、このセンターは、英語、その他の教科、生活がスムーズにできるように教える施設であるが、母国語を学習しながら英語を勉強するのがよいと話された。母国語を大切にしない親もいるが、そうではないと教えているようである。



学習に関して、年齢が上の子どもは学ぶのに苦労するようである。また、高校で良い点をとるようになるまでには、8年くらいはかかるということである。本校では短期で集中的に学習ができるようにカリキュラムをコンパクトにして工夫をしている。高校に進むと、ESLの専門の先生がいて、また、週2回の補講に出席することもできる。

このような環境の中、大学に進み、医学を専攻し、医者になった子どももいるとのことであった。難民という境遇の中、教育の機会を与えられることにより、能力を開発できるのは素晴らしいことである。

私たちは図書館に案内され、モーニングティーの歓迎を受けた。たくさんの先生方が出席してくださり、興味深いお話を聞くことができた。モーニングティーやアフタヌーンティーは、豪州の習慣である。これには、来客に対する歓迎の意味があり、また、会議の間の休憩の意味もある。また、交流を深め、いろいろな人と話すことも目的としている。

図書館の資料は、十進分類法により分類されていた。新着図書コーナーもあり、子どもの興味を引く工夫が凝らされていた。中国語やタイ語、韓国語、フランス語で書かれた本もあり、難民の子どもたちの母国語に対する配慮が感じられた。

校内にはテラスがあり、休憩時間、子どもたちはテラスの下に集まっていた。何人かの男の子たちバスケットボールに興じていた。

また、私たちは、校長先生の計らいで、実際の授業を体験させていただいた。実際、オーストラリアの街角で話されている会話をテープで聞き取るという体験であったが、ネイティブの会話は早く、また、教科書に書かれていることとは違うため、かなり難しいものであった。しかし、このような実際役に立つ学習が必要なのだと感じた。

また、私たちは、生徒と一緒に授業をうけさせていただいた。あるクラスでは、英語の

動詞と過去形を学習する授業が行われていた。子どもたちは二人ずつペアになり、トランプの神経衰弱の要領で、伏せられた紙を二枚めくる。動詞の現在形 (Take) と、過去形(Took)をめくれば OK というものであり、我々は子どもたちと楽しく学ぶことができた。

それから、私たちは英語の発音クラスも見学させていただいた。20人弱の子どもたちは、発音をする口の形のイラストが描かれたスライドを見ながら、

先生が、大きく口を開けて教えていた。子どもたちが答えると、必ずといっていいほど、



先生は褒め言葉をかけていた。先生がジェスチャーを交えて教えてくれる授業は楽しいものであった。

NSW 州教育省では、2006 年に、二つの新しい施策を打ち出した。Cultural Diversity and Community Relations Policy と、Anti-Racism Policy である。豪州社会の中で、移民が成功を収めるよう支援し、日常生活の中で生き残るための教育を行っていく方針である。また、文化の多様性を認識、理解し、あらゆる人種差別をやめるという信念でやっていく。このことは、難民に対してきちっと教育を行い、アラブ系移民への配慮をしていくことにもつながる。また、学校では、Cultural Exchange programs があり、学校で、自分とは違う文化の背景を持つ生徒から、違う文化を学ぶことにより、バリアやステレオタイプをなくすことを目的としている。

このような環境の中、また、熱心で素晴らしい先生、スタッフの方に見守られながら、学習に励むことができるのは幸せだと感じた。移民の子どもたちの未来が明るいことを願ってやまない。

※ NSW 州教育省の決まりにより、生徒の顔が分かる写真の撮影は禁じられていた。

【愛知県国際交流協会 平松哉人】

【和歌山県国際交流協会 池上加奈】